

驚異・情熱・不安

——知の三つの源泉

塩野谷 祐一

(財団法人 家計経済研究所 会長)

厚生経済学は、経済のあるべき姿を論ずる規範的な経済学である。厚生経済学の創始者と見なされているケンブリッジ大学のA. C. ピグーは、かつて大著『厚生経済学』の中で経済学研究の主たる動機を説明するに当たって、哲学と比較しながら次のように書いた。「カーライルは、哲学の始まりは驚異であると断言した。しかし、経済学の始まりは驚異ではなく、陋巷の汚穢と凋萎した生活の陰鬱に憤る社会的情熱である」。ここでピグーは「光をもたらす学問」と「果実をもたらす学問」とを区別し、その例として哲学と経済学を挙げたのである。

ピグーがなぜ19世紀のカーライルを持ち出したかは分からない。すでに2400年も前に、ギリシャの哲学者は、哲学的な問いの動機は驚異であると述べている。プラトンは『テアイテトス』の中で、ソクラテスの言葉として、「驚異の情こそ知を愛し求める者の情である。求知（哲学）の始まりはこれよりほかにはない」と書いている。アリストテレスも『形而上学』の中で「驚きによって、人間はまさに知の追求（哲学）を始めたのである」と書いている。「最初は、ごく身近の不思議な事柄に驚異の念を抱き、次第にはるかに大きな事象についても疑念を抱くようになった。たとえば、月や太陽や星の諸相について、また全宇宙の生成について、驚異の念を持った。このように疑念を抱き、驚異を感じる者は自分を無知な者と考える。……だから彼らは無知から脱却するために知恵を求めたのであって、何らかの効用のためではなかった」。

人々は何に驚いたかといえ、何が存在する

という事実であり、人々は何かが存在するということはどういうことなのかという問いを出したのである。これが存在論の問いであり、哲学の基本問題となった。ウィトゲンシュタインも『論理哲学論考』の中で、「神秘的なのは、世界がいかにあるかではなく、世界があるということである」と確認している。

マルクスは、これだから哲学者は駄目だと断じた。「哲学者は世界をいろいろに解釈してきたにすぎない。大切なことは、世界を変えることだ」。「光」よりも「果実」を、というわけである。ロンドンのハイゲート墓地にあるマルクスの巨大な墓碑には、この言葉が刻されている。変えるといっても、暴力による革命もあれば、ピースミールな改革もある。ピグーが経済学を研究する動機として述べたのも、「果実」を求めて世界を変えることであった。

ピグーの恩師であるアルフレッド・マーシャルはケンブリッジ学派の創始者であり、同じように博愛と情熱に基づく社会改良の意識を経済学研究の根底に置いていた。彼の伝記には、次のようなエピソードが書かれている。彼は人間の福祉の向上に資することを志して、倫理学から経済学に転じた人であったが、経済学を始めたころ、憔悴と悲嘆に打ちひしがれた貧しい男の顔を描いた一枚の油絵を古道具屋で買い、それを「守護の聖人」と呼び、日々これを眺めることによって、自分が経済学の理論的遊戯に堕することがないように自戒したという。彼は無知と貧困の中にある人間の「悲惨」を克服するために、人間の能力を高めることを社会の究極的目標とみなした。経済問題の

解決はその可能性の前提条件にすぎなかった。

規範的経済学としての厚生経済学は、「生産の効率」と「分配の正義」という二つの基準を中核としている。ピグーやマーシャルに典型的に見られるように、経済学の出発点は「効率」や「正義」といった抽象的な観念ではなく、むしろ人間の「悲惨」にまなざしを向けた社会改善の情熱であった。このような考え方はイギリスの伝統の経済学に限られるものではない。ドイツ歴史学派の後継者を自任したマックス・ウェーバーは、同じ考え方をいっそう強調することができた。彼はフライブルク大学教授就任講義において、これまで経済学では「生産の効率」や「分配の正義」の問題が価値基準として前面に取り上げられてきたが、人間に関する学問としての経済学の主題は、生活の経済的・社会的条件によって形成される「人間の質」でなければならないと論じた。彼はいう。「われわれの世代が墓場に入ったのちのことを考えると、われわれの心を突き動かす問題は、将来の人々が享受する福祉はどのようなものかということではなく、彼らがどのような人間になるかということである。これが経済学のあらゆる活動の根底にある問題である。われわれは人々の福祉の向上を願うのではなく、人間としての偉大さや人間性の気高さを構成する資質を育てたいと思う」。

しかし、経済学者を突き動かす社会的情熱と経済学の理論的内容との間には、明らかにギャップが存在する。効率と正義が達成されても、「人間の質」が向上するわけではない。それは経済学が人間存在の質、能力、卓越、美德といった概念と、それらを組み込んだ理論的枠組みを欠いているためである。上に見たような「人間の質」についての思慮に富んだ考え方も単なる散文にとどまり、著作の行間に埋もれてしまったのである。

「世界がある」ということへの「驚異」の感情から始まった哲学の営みは、やがて「世界がいかにあるか」への「好奇心」に取って代われ、自然や社会の対象世界に応じてさまざまな専門的学問が生まれた。ハイデガーの言葉に従えば、「存在論的」問いから「存在的」問いへの転換が生じ

た。ハイデガーはこれに抗して、改めて「存在論的」問いの重大性を提起した。彼の独創的な仕事は、フッサールが構築した現象学を人間存在（ハイデガーはこれを「現存在」と呼ぶ）の実存論的分析に適用し、それを梃子として新しい存在論を展開したことである。

ハイデガーによれば、人間存在が世界とかかわりを持つのは、その「関心」(Sorge)のゆえである。関心によって形成される対象世界は人間にとって道具的ネットワークの体系をなし、人間はその中に他の人々と共同的に「世界内存在」として組み込まれている。そして人間存在の基本に迫る方法的基礎が「不安」(Angst)として定義される。すなわち、人間は不安の中で初めて自分自身の存在を明らかにすることができる。人間および世界は時間の中に置かれており、時間的に有限の人間はつねに「死への存在」であり、一方において、不安と絶望とニヒリズムに傾くと同時に、他方において、有限の認識を通じて生の驚異と至福と躍動に目覚める。このように人間を拘束する諸条件の下で、人間は生の価値を高め、新しい自我を形成するために、可能性の実現に向けて動態的・革新的な構想と企画を持つ。

このような存在論的観点から見ると、知への志向は人間の存在可能性を開拓するひとつの主観的な試みであって、ものごとの存在の意味を問う哲学は、存在と人間との関係を問うものである。人間が一方的に存在を規定するのではなく、逆に存在の真理が人間に働きかけてくるというのが、ハイデガーの後期の思想であるといわれる。彼は存在が自己を開示することを「存在の明るみ」と呼ぶ。彼にとっては、「光をもたらす学問」としての存在論は、人間と存在の真理との間の相互作用をとらえることである。究極の「果実」としての「人間の質」について求められている洞察は、単なる「驚異」や「情熱」を超えた「不安」のエトスから見た思索の地平を必要とするのではないか。

しおのや・ゆういち 財団法人 家計経済研究所 会長・一橋大学名誉教授。経済哲学・経済思想史専攻。